OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	他者性の尊重：移民と向き合うイタリアの精神科医と心理士の治療思想
Author(s)	彌吉, 恵子
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87805
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　彌吉　惠子　）	
論文題名	他者性の尊重：移民と向き合うイタリアの精神科医と心理士の治療思想

論文内容の要旨

要旨

キーワード：他者性、移民、移住・移動、包摂、イタリアの精神保健

近年、移民受入国では、移民にたいしてどのような精神保健サービスを提供するかが課題となっている。往々にして、移民の出身地における心の病いの捉え方や癒し方と、西洋近代的な精神医学を学んだ臨床家たちによる診断や治療の間に齟齬が生じるため、臨床家にとって移民の精神障害者は、同邦人の精神障害者とは異なる他者となっているからである。そこで一部の臨床家たちは、移民の精神障害者とホスト市民の精神障害者の間にある文化的な差異や個々人の特異性といった、移民の他者性に着目するようになった。診断や治療の場面において、移民の他者性が、その移民にとってどれほど病いに影響を与えうるのかをその都度評価し、必要と考えられる場合には、移民の他者性に配慮しつつサービスの適正化を図ることで、移民の精神障害者にたいして、ホスト市民の精神障害者同様の適切な精神保健サービスを保障しようと考えたのである。では移民の他者性に配慮しようとする臨床家たちは、移民の精神障害者の他者性をどのように取り扱おうとしているのであろうか。

そこで本研究では、近年、世界各地から移民が流入するようになったイタリアにおいて、精神障害者を地域社会の一市民として包摂する地域精神保健制度のもと、移民の他者性に配慮した精神保健サービスの提供を試みる臨床家らに注目し、現地調査と文献研究をとおして、他者性の取り扱いに関する彼らの省察を検討した。まず、現地調査は、ミラノ、ローマ、ピサにおいて、2016年11月から2020年2月まで断続的に行った。研究参加者は計45名で、各人にたいして半構造化インタビューを行うとともに、彼らが働く医療機関や心理士養成校、関連のセミナー、事例検討会などでは参与観察も行った。また、データの分析にあたってはコーディングを行い、主要な概念を抽出した。一方、文献研究では、臨床家らが臨床で参考にしている文献と、その文献で提唱されている概念などをとりあげた臨床家らの論考を取り上げ、彼らの「参考書」で提唱されている概念などが、どのように解釈され、臨床で活かされようとしているのかを検討していった。

第一部では、文献研究と聞き取り調査、参与観察の結果をとおして、移民の他者性を考慮することで適切なサービスを提供したいと考える臨床家たちが、どのような文脈で移民の精神障害者と出会っているのかを紹介した。まず、1978年に精神病院の閉鎖をめぐり精神科医のバザーリアとトビーノの間に生じた論争と、2014年の難民の自殺事件をとりあげることで、移民の精神障害者を地域社会の一員として迎え入れる地域精神保健制度では、移民の精神障害者の社会的包摂が同化に転じる可能性が排除しきれないことを指摘し、臨床家らが移民の同化なき包摂を試みる必要があることを示した。続いて、昨今イタリアでは、重篤な精神障害に苦しむことがある難民が急増し、臨床家らは、入院治療を殆ど行えずジレンマを覚える一方で、難民のための精神保健事業に参加して業績をつくろうと、イタリア国内の他の都市や学派・団体で活動する臨床家らと競争をしている場合もあることを叙述した。

第二部では、文献研究の結果をとおして、移民の他者性の解釈に努める臨床家らが、民族誌家のデ・マルティーノと心理士・精神分析家のナタンの思想から、移民の他者性を取り扱ううえで有用となりえる、どのような指針を導出しているのかを検討した。臨床家らは、デ・マルティーノの思想からは、歴史過程の諸関係のなかで移民の他者性を解釈しつつ、精神医療の文化的特性に気付くことで、精神医療そのもののあり方を見直す、という指針を導出し、ナタンの治療思想からは、解釈が難しい他者性を取り扱う際には、第三者にも解釈を委ね、適切と考えられる場合は、他者性を解らないものとして留め置くという指針を導出していたと考えられた。

第三部では、主に聞き取り調査と参与観察の結果をとおして、診断や治療の場面で移民の他者性を考慮しようとする臨床家らが、移民の他者性をどのように取り扱おうとしているのかを検討した。まず、考慮するか否かの判断が難しい移住・移動の経験という他者性をとりあげ、臨床家らが、特定の考え方だけに依拠しないよう努め、その判断をつけようとしていると指摘した。一方、潜在的な移民の他者性の看過を回避しようとする臨床家らは、イタリア人と移民の間のやりとりに第三者を介入させることで、潜在的な移民の他者性の顕在化を図っており、そうすることで移民を同化するのではなく、他者として留め置こうとしていると論じた。最後に、解釈が難しい他者性である、移民の治療体系の考慮のありかたを検討し、病いの解釈を試みるとき移民の治療体系を採り入れようとする臨床家らは、複数の治療体系のどの治療体系も優位に立たせず相補的に用いようとするが、適切と判断すれば、移民の治療体系を優先的に考慮した解釈を行うということを示した。

イタリアで移民の他者性に配慮した精神保健サービスを提供しようとする臨床家らは、移民の他者性を維持し、それを価値あるものと認めて積極的に活用しようとすることで、自分自身の他者性と向き合うことになり、それは自らの他者性の尊重に繋がっていくのだといえる。ところがそのとき、臨床家は競争相手である国内の他の学派の臨床家と積極的に交流しようとはせず、その他者性の維持や活用を図ろうとはしないことから、移民の心の病いの治療者としての自らの他者性も尊重するまでには至っていないと思われる。イタリアでは、移民の他者性を適切に取り扱いたいと願う臨床家たちによって、他者性を尊重するための治療思想が形成されつつあるが、それはまだ、あらゆる他者性を尊重するための治療思想ではないと考えられる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　彌吉　惠子　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主 査　教 授	藤目　ゆき
	副 査　講 師	島薗　洋介（グローバルイニシアティブ機構）
	副 査　教 授	宮原　曉（言語文化研究科）
	副 査　教 授	千葉　泉

論文審査の結果の要旨

彌吉惠子氏の博士論文「他者性の尊重――移民と向き合うイタリアの精神科医と心理士の治療思想」は、精神科医や心理士などの臨床家が、近年急増する移民の患者にどのように向き合いながら、精神保健サービスを提供しているのかを、思想史的文献調査、聞き取り、参与観察等の多様な調査方法を用いながら明らかにしたものである。イタリアは、精神障害者を隔離し監視する病棟を廃止し、精神障害者を地域社会のなかでケアするという、世界のなかでも希有な取組みがなされてきた国である。彌吉氏の論文は、そうしたイタリアの精神保健の現場で、精神科医や心理士が移民や・難民の精神障害者という新たな「他者」とどのように向きあうのかについて、その思想的な特徴に着目し考察しようとした点において、オリジナリティに富んでいる。

本論文の第一部では、かつては移民の送り出し国として知られたイタリアが、第二部以降の論述の背景となることがら―移民・難民の受け入れ国となった現状および精神保健の仕組み―が丁寧に記述されている。彌吉氏は、現在のイタリアでは、ホスト社会への定着を目指すわけではなく、一時的に滞留する移民・難民が増加している点を指摘し、こうした現象がイタリアの精神保健の現場が精神科医や心理士などの臨床家にこれまでとは異なった困難を突き付けていると論じている。

本論文の第二部は、思想史的手法を用いながら、イタリアの精神医学の思想的背景について検討している。1960年代における精神保健改革の中心人物としての高名なバザーリアと、バザーリアに意義を唱え、精神病院の必要性を主張したトビーノの論争を辿りながら、精神障害者の他者性にたいするイタリアにおける相反する思想的な潮流の存在を明らかにしている。バザーリアの思想は、わが国でもよく知られているが、本論文では、彌吉氏は、忘れかけられた存在であるトビーノの思想にも光りを当てる。トビーノの思想は、地域社会のなかに「市民」として精神障害者を包摂しようとする一見、先進的なイタリアの精神保健改革が、狂気に生きる他者の同化に転じてしまう危険性を指摘していた。本論文では、彌吉氏はこうしたトビーノの思想が、現在の精神保健の現場で、移民という他者に対する配慮しようとする一部の精神科医や心理士の取組みの思想に連なることを示唆している。論証の手続きが十分とは言えない点はあるが、これは極めて興味深い主張であると言える。

さらに、第一部では、近年のイタリアにおける多文化精神医学における独自の思想形成の動きを、デ・マルティーノの再評価およびトビ・ナタンの民族精神医学の受容に着目しながら明らかにしている。わが国では、英米の多文化精神医学については専門家の間でもよく知られているが、移民・難民流入をめぐって特殊な状況にあるイタリアにおける多文化精神医学はあまり知られておらず、彌吉氏の論述はこの点において希有な価値を有すると言える。

本論文の第三部では、主に精神科医や心理士などの臨床家たちの語りの検討や参与観察の事例の検討に当たられている。第三部における語りや事例の考察において際だっているのは、ジェームス・クリフォード編の*Writing Culture*の登場以降の人類学における他者性をめぐる議論を十分に消化したうえで、そこで提出された概念や論点を利用しながら、イタリアの臨床家の省察的実践を記述し、解釈することに成功している点である。これまで他者性をめぐる人類学の議論は、多くの場合フィールドワークに携わる人類学者の側において、エスノグラフィックな方法論の検討に関連して論じられてきた。本論文では、こうした他者性をめぐる議論を、「調査する者」と「される者」との間でのみ問題にするにとどまらず、精神保健サービスを必要としている移民と臨床家の間においても問題としている。もちろん、こうした記述を可能にしたのは、本論文の参与観察の対象が、行為のなかの省察

（reflection in action）を必要とする臨床家のプロフェッショナルとしての性格が大きくものを言っている。しかし、本論文がそうした臨床家の実践的省察をつぶさに観察することで、治療実践の対象となる移民の他者性が臨床家にとって常に治療の前提とはなっていないこと、移民の他者性への臨床家の配慮が、場合によっては他者性を配慮しないという選択を生み出すこと、さらに臨床家が自らを移民に対する他者と積極的に位置づけることで治療の効果をあげようとしていることに気づき、これらの点に関して単なる治療実践としてではなく、治療思想として、十分に説得力のある記述するのに成功している点は、~~1~~斬新な点として高く評価できる。

移民の精神医療に携わるイタリアの臨床家が自らを移民にとっての「他者」と位置づけることに関連して、本論文では、精神科医と心理士に加えて、臨床家と移民を媒介するメディエーターに焦点を当てることで、臨床家の他者性の性格を浮き彫りにしている。メディエーターは、治療の対象となる移民の文化を臨床家に翻訳し、また逆に臨床家の文化を移民たちに翻訳する役割を果たしている。臨床家にとってもう一人の移民となったり、移民にとってもう一人の臨床家となったりすることで、移民と臨床家の間でなされるコミュニケーションが必要以上にスムーズなものとならないように、警告を発する。精神保健サービスにおけるこうしたメディエーターの役割を分析することで、臨床家の「他者性への配慮」の複雑な構成が明らかになるのである。

こうした本論文におけるが臨床家の治療思想の記述が特に注目に価するのは、移民の精神障害者の社会的包摂が同化に転じる可能性に警鐘を鳴らしている点においてである。移民の精神障害者を地域社会の一員として迎い入れようとする地域精神保健制度では、移民を「他者」として社会の他の成員とは異なった存在と見なして排除するか、「他者」としての位置づけをしないことで、同化を強いる結果となる。「社会適応」をめぐるこうしたジレンマは、多文化共生を標榜する現代社会のさまざまな面で今日観察することできるが、精神保健という具体的な分野において、臨床家が現実に直面するジレンマとして論点を整理し、提示している点において、本論文は学術的のみならず社会的な意義を有していると考えられる。

本論文には、改善すべき点もある。まず、対象の限定や広がりについて十分な情報を読者に提示しているとは言いがたい点である。本論文で取り上げられている臨床家やかれらの治療思想はイタリアにおける臨床家の典型的なものとは言えないことは容易に推察されるのであるが、そうであれば、本論文でとりあげられている臨床家やかれらの治療思想がイタリア社会でどのように出現し、また彼らの精神保健分野での文化的運動がどの程度の広がりをもつものなのかについて、より丁寧な記述がなされるべきである。また、本論文では現在の精神保健分野での他国の動向への言及が少なく、比較文化的な考察が十分になされているとは必ずしも言えない。さらに、他者論というメタ人類学的議論で提示されてきた概念や視点を研究の対象や考察に活かすというアイデアは独創的かつ挑戦的であるが、概念的枠組みの精緻化にはさらなる努力の余地がある。とはいえ、以上のような改善点が残るのは、本論文が思想史、地域研究、人類学を横断する野心的な研究であることを鑑みれば、十分に理解できることであり、彌吉氏が今後の研究活動のなかで取り組むことを審査委員は期待するものである。

以上、論文審査の結果、本論文は、博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。